

平成 21 年度農林水産生きものマークモデル事業
第 1 回検討委員会 議事録（概略）

日 時：平成 21 年 8 月 6 日（木）14:00～16:30

場 所：株式会社アミタ持続可能経済研究所 東京オフィス 9 階会議室

参加者：[検討委員（有識者）]

宇根 豊氏（NPO 法人農と自然の研究所 代表）

竹内 純子氏（東京電力株式会社 尾瀬保護活動担当）

中庭 知重氏（社団法人産業環境管理協会 環境技術部門主査）

吉野 章氏（京都大学大学院地球環境学堂 准教授）（ 50 音順）

[農林水産省大臣官房環境バイオマス政策課地球環境対策室]

木内 岳志氏（室長）、圓谷 浩之氏（課長補佐）、佐藤 大輔氏（係長）

[㈱アミタ持続可能経済研究所：事務局]

1. 生きものマークについて

- ・ 生きものマークに取り組むことによって、まず生産者自身が作り方に対する認識が深まるだろう。生産者と消費者の新たな形のコミュニケーションだとも思っている。
- ・ 現時点では、本格的な生きものマークはできていないと考えている。まだ取り組み自体が歩み始めたばかりで、いろんなレベルのものが混在している。
- ・ 生物多様性の認知については人によって大きな違いがある。そのような中で、どういうマークを作って、誰に向けて何をアピールするのかをはっきりさせるのが大事ではないか。
- ・ まず、生きものマークに関連した取り組みの存在を知ってもらわなければならない。そういう役割を担うのであれば、ブランド価値を表すマークとしては、まだ先の話ということになる。まずは付けることに意義があるということでスタートするのがいいのではないか。
- ・ 生きものマークというのは新しいスタイルの販売戦略になるのではないか。産物が生産されている自然環境や自然の恵みを引き出している世界に、消費者の想いを誘うような販売の仕方は極めて新しいやり方だと思う。しかし今は十分にそれが展開されていないことも事実である。
- ・ 生物多様性は現在、明確な評価基準や指標がない状態である。それがなければ認証はできない。であれば、現時点では生きものマークをコミュニケーション手段としての位置づけにして、将来コンセンサスがとれてきたら認証にも移行するという取りまとめ方にするのが良いかもしれない。

2. 本事業の進め方について

- ・ 生きものマークの課題やきちんとここで検討して、突破口を見出し、マークの付き合い方、PRの仕方、表現の仕方、消費者に対する誘い方を検討してほしい。
- ・ 農業、林業、水産業で、生きものマークの付け方を同一に取り扱えるのかどうか検討しないといけない。
- ・ 消費者の認知について、既存の調査結果などを取り込むべき。また、事例集や手引きのドラフト版を作って、消費者の反応をうかがう期間を設ければ、より良いものができるのではないかと。

3. 本事業のアウトプット（事例集や手引き）のイメージについて

- ・ 生きものマークがどういったところを目指していくのかを、きちんと示した方がいいのではないかと。
- ・ 生産者に対しては、まず事例を見て、自分たちはどこから入れればいいのかわかるもの。また消費者に対しては、こういうマークを探せばいいというのがわかるもの。少し欲張りかもしれないが、両者が見て同じところに行き着けば良いと思っている。
- ・ 生きものマークの対象領域については、線引きの境界は議論があるとしても、できるだけ事例はたくさん紹介してほしい。こういった展開ができる、という方向性を示すためにもいろんな事例を引っ張ってくるのは大事なのではないかと。
- ・ 流通・小売事業者は消費者と生産者をつなぐ重要な位置。先行事例の場合もあると思うので、流通・小売事業者主導の取り組みも事例として取り上げてはどうか。
- ・ 手引きへの推奨事項の記載は今の段階では難しいかもしれないが、例えば成功事例の紹介だったらいいのではないかと。あまり禁止事項ばかりだとインセンティブを削ぐようなことにならないかと。
- ・ 当然やっただけいけないことは伝わるようなものにしないといけないが、「やりましょう」「できますよ」と誰でも楽しく取り組めるようなものにするには、ハードルはなるべく低く、取り組みの奥行きは深くするような構成にしてほしい。

4. 次回委員会（第2回）について

【日程】平成21年9月29日（火） 午後

【場所】株式会社アミタ持続可能経済研究所 東京オフィス 9階会議室にて、開催する。

以 上